
2007年度春学期 第5回学期末レポート



Date: 2008年5月23日

Authored By:
Gallaudet University,
Master of Social Work
高山 亨太
精神保健福祉士、M.S.W.

2007年春学期第5回学期末レポート

1. はじめに

今学期は、秋学期と比べて比較的學校生活に慣れてきたことと、学生寮に戻ったため比較的スムーズに新学期に入ることができた。今学期は学会への参加、進級テスト、また個人的なことではあるが祖母の逝去など様々なことが重なり、心身共に大変な学期であったが、終わってみれば少し自身の成長を実感できた学期でもあった。次学期からは、本来の留学目的の1つである「聴覚障害に焦点をあてたソーシャルワーク」を学ぶので、夏休みに履修予定である「聴覚障害児・者支援入門」のクラスを履修しながら、秋学期の学習に備えたいと考えている。

2. クラスの状況

今学期は、インターンシップをのぞき、1月22日から春学期が始まった。今学期は、初めてスクールソーシャルワークのクラスを履修し、また以前から強い興味を持って取り組んできた精神障害リハビリテーション領域に関わるアメリカの精神疾患の診断基準であるDSM-IV-TRを学ぶクラスも履修した。今学期は、主に秋学期に引き続き、ソーシャルワーカーにとって重要な基礎知識や技術を学ぶクラスを中心に履修し、今学期はさらに個人レベルの援助方法ではなく、主に地域、政策レベルでの援助方法を中心としたクラスカリキュラムを履修した。しかし、特に水曜日は朝の9時から夜の8時まで講義があり、かなり健康管理の難しいクラススケジュールであったが、水曜日の夜は、たまにクラスメイトとビールを飲んだりして、リラックスした。

2007年春学期第5回学期末レポート

表 春学期のクラススケジュール

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日			
7:00am	起床・朝食							
8:00am	シャワー							
9:00am		通勤	Social Work Practice II	通勤	Data Analysis			
10:00am		インターンシップ (Child and Family Services Agency)	Social Work Practice II	インターンシップ (Child and Family Services Agency)	Data Analysis			
11:00am								
12:00am	昼食					昼食	昼食	
1:00pm	Human Behavior and Social Environment II					DSM-IV-TR	DSM-IV-TR	DSM-IV-TR
2:00pm								
3:00pm								
4:00pm							夕食	夕食
5:00pm		School Social Work Policy	School Social Work Policy	School Social Work Policy				
6:00pm								
7:00pm	夕食							
8:00pm	勉強	夕食	休憩	夕食				
9:00pm		勉強	読書	勉強				
10:00pm			勉強					
11:00pm	シャワー							
12:00pm	次の日の準備							
2:00pm	就寝							

Human Behavior and Social Environment IIでは、国家や地域レベルの政策がどのように人々の生活に影響を与えるのかについて学び、さらにその分析方法を学ぶことを目的としている。さらに地域の特性や文化がどのように人々の暮らしに影響を与え、またどのような課題があるのかについてディスカッション、プレゼンテーションなどを通じて、文化や地域特性に関する造詣を深めていった。また組織や施設の構造分析についても学び、よりよい施設運営のための各種分析技術についても宿題などを通じて学ぶことができた。今後の日本でのろう運動などを支えるときに活用できそうである。何らかの社会活動を進めるときには、理論的裏付けが重要なことを知った。

Internshipは、秋学期同様にChild and Family Services Agency (CFSA) にてインターンシップをし、各種援助技術について現場経験を通じて学んでいくことを目的としている。秋学期にお世話になった Gallaudet UniversityのMSW卒の手話のできるソーシャルワーカーが退職したため、今学期から、新しいプログラムに異動し、新しいソーシャルワーカーの下にて1つのデフファミリーのケースを全面的に

2007年春学期第5回学期末レポート

担当した。このケースは、裁判所も関わっているため責任は重大であるが、指導を受けながらよりよい支援ができるようがんばっていきたい。また隔週の金曜日の午後にインターンシップの様子を報告、ディスカッションしながら、他の学生と経験や情報を共有するInternship Labがあった。

Social Work Practice IIでは、Human Behavior and Social Environment IIと同じように国家や地域レベルの政策がどのように人々の生活や地域の活動に影響を与えるのかについて学び、それに対する介入方法や政策策定の過程について学ぶことが大きな目的となっている。Human Behavior and Social Environment IIが分析方法に重点を置いて学ぶのに対して、ここでは介入方法に重点を置いて学んだ。どのように政策立案、提案、評価、フィードバックなどの介入方法について具体的に学ぶことが出来た。特に評価（Evaluation）はすべての分野において重要なことであり、多くのソーシャルワーカーが調査方法（Data Analysis）について知ることの重要性を改めて考えさせられた。

DSM-IV-TRは、The Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 4Th Editionであり、日本での正式名称としては、「精神障害の分類と診断の手引き」と訳される。これは、「アメリカ精神医学会」で定義している精神疾患の分類と診断のマニュアルと基準となっており、多くの精神科医やソーシャルワーカーがクライアントの精神状態を分析するときに用いられている。現在は、第4版1994年から発行されているが、近年中には、第5番が発行される予定となっている。DSM-IV-TRの本は、携帯用に適するように作られた小型版と具体的な診断例などを網羅した大型版の2種類ある。ソーシャルワーカーは医者ではないので、このクラスでは主に小型版を使用して、クライアントの精神状態を判断し、援助に役立てることを学ぶことを目的としている。もちろん精神保健福祉領域で就労を目指す場合には大型版を駆使して、精神状況を判断し、援助が出来る知識や技術が求められる。日本でも精神保健福祉士国家資格が精神疾患についての知識を求められるようにアメリカでも多くの社会福祉系教育学校がDSM-IV-TRのクラスを開講している。日本では、ICD-10などの診断方法も使用されていることから、ア

2007年春学期第5回学期末レポート

アメリカのように DSM-IV-TRによる診断に統一されているわけではないが、ソーシャルワーカーによるクライアントの精神状態の理解において役に立つツールでもある。特に聴覚障害児・者支援領域では、多くの精神科医の聴覚障害に関する理解不足による誤診が存在するため、聴覚障害に関する知識を持ったソーシャルワーカーによる誤診の予防も重要なことである。これは、聴覚障害のあるクライアントへの権利擁護につながる。残念ながら、私の経験上、日本ではまだまだ多くの聴覚障害児・者が精神障害や発達障害の誤診を受けていることが少なくはないのが現状であると考えられる。

School Social Work Policyは、学校現場における法律や方策について学び、基本的なスクールソーシャルワークについての概念を学ぶことが目的となっている。アメリカは、1900年初頭から学校におけるソーシャルワーク的な試みが開始されており、現在は法律的にも明記されており、多くの学校にスクールソーシャルワーカーが配置されている。日本でも文部科学省が2008年4月より全国の約140地域にスクールソーシャルワーカーを配置することを決定しており、今後のろう学校におけるスクールソーシャルワーカーの配置を目指すために様々な知識や政策を学んだ。しかし、最近わかったことは文部科学省が進めるスクールソーシャルワーカーの制度は地域差があると思われるが、基本的に特別支援学校は対象に入っていないようである。

Data Analysisは、各種調査で得られたデータを分析するための各種手段を学ぶことを目的としている。調査方法については、日本で十分に習得してきたのでこのクラスは免除されたが、英語の各種専門用語を理解するために聴講生として参加した。何よりも最終レポートの時期に多くのクラスメイトが統計処理の方法や分析結果の訳し方に苦戦し、チューターではないが時間のあるときに個別、グループで統計方法について説明したり、フィードバックをしたりするなど、初めて自分の得意分野で協力することができ、寮に移ったことによって、多くのクラスメイトと様々な点で助け合いながら学期を過ごすことができるメリットを感じた。改めて、統計とは世界共通であるのだと考えさせられた。

2007年春学期第5回学期末レポート

3. インターンシップ

大学の講義は、1月22日から開講するが、インターンシップは1月第1週か2週目から開始することが求められていたため、早めに渡米し、1月10日より秋より引き続きChild and Family Services Agency (CFSA) でのインターンシップを再開した。秋学期は、4つの聴覚障害のケースにアシスタントとして関わっていたが、今学期から新しく1つの聴覚障害のケースを全面的に担当した。このケースは裁判所が関わっているケースであり、依然として虐待のリスクが高いケースであった。さらに多くの学生が旅行などを楽しんでいる春休みの最中に、自分の担当のケースの裁判を経験した。ケースを担当するソーシャルワーカー（実際にはインターンであるが）として、前回の裁判から3月までの3ヶ月間にわたる家族の状況やサービス提供の状況などを実際のサービス提供状況に基づいて、裁判官の前で話をする事ができた。裁判では、Child and Family Service Agency側の弁護士、高山（ソーシャルワーカー）、子どもの弁護士、父親の弁護士、父親、母親、母親の弁護士の順にテーブルで横に並んだ。正面には一人の課程裁判官と記録員が座り、円形状に向かい合っている。一般的な虐待、育児放棄のケースではこのようにアーチ状に一行に並ぶようだ。後ろに、私のスーパーバイザー、両親のカウンセラーなどがそれぞれ着席し、主に裁判官の質問に答える形で裁判が進められた。私も含め、当事者である両親もろう者であるため、裁判所から1名の法律専門の手話通訳者が派遣され手話通訳を行っていた。

アメリカにおける法律専門の手話通訳というのは、法律に関わる手話通訳を有している手話通訳のことであり、裁判などの場面での通訳技術や知識、また経験が求められている。具体的には、Registry of Interpreters for the Deaf (RID、日本で言う日本手話通訳士協会)が実施する試験であるSpecialist Certificate: Legal (SC: L) の試験に合格した手話通訳者が裁判所に派遣される。具体的な条件や内容については、以下のウェブサイトから閲覧できる。

http://www.rid.org/education/edu_certification/index.cfm/AID/46

2007年春学期第5回学期末レポート

インターンシップの最終日までに、実習先に提出する宿題や担当ケースのフォローアップのための裁判所へのレポートの作成などもこなさねばならず、大変な日々であったが、4月24日にインターンシップ先にて、ソーシャルワーカーを対象としたろう、難聴者への支援方法に関するワークショップを開催した。現在、ろう・難聴のクライアントと働いている、もしくは、ろう・難聴について知らないソーシャルワーカーを対象に3時間のワークショップを開催することができた。企画、アウトライン、シラバスなどを作成し、当日の講師はGallaudet Universityの教員とともに担当した。当日は、定員近くの10名の参加が得られ、小人数での内容の濃い講義ができ、貴重な経験をした。このワークショップをきっかけに児童福祉領域でのろう、難聴者への政策面を含むサポートに興味を持っていたいたソーシャルワーカーもおり、1年間に渡るインターンシップの成果が反映されたと感じることでできた充実した1日であった。このような講義やワークショップを帰国後に開催できたらと感じた経験であった。

4. アメリカスクールソーシャルワーク協会

4月3日から6日までコロラド州のデンバーにて開催されたアメリカスクールソーシャルワーク協会の学会に参加したことは、自分にとって貴重な経験でもあり、初めてのアメリカの学会デビューであった。

アメリカには、ソーシャルワーカーが加入している世界でもトップレベルの専門職能団体として知られている全米ソーシャルワーカー協会（National Association of Social Workers: NASW）があるが、アメリカスクールソーシャルワーク協会(School Social Work Association of America: SSWAA)は、主に学校教育現場で子どもや家族に対するカウンセリングも含めたソーシャルワークサービスを提供しているスクールソーシャルワーカーが加入、運営している。また全米ソーシャルワーカー協会と方針が異なるのは、ソーシャルワーカーではなくソーシャルワークを協会名に取り入れている部分である。全米ソーシャルワーカー協会への加入条件が基本的にソーシャルワーク修士号（Master of Social Work）を

2007年春学期第5回学期末レポート

取得していることを重視していることに対して、アメリカスクールソーシャルワーク協会は、ソーシャルワーカーのためだけの協会ではなく、子どもを中心に考えるためのスクールソーシャルワークの研究や実践すなわち専門職ではなく専門的援助技術が重要と考えているのである。

アメリカスクールソーシャルワーク協会の学会では4日間にわたって、学校現場における各種問題への対応や支援策に関するワークショップや発表、さらに政策レベルでの協会の取り組みについて知ることができた。ワークショップは、学校現場におけるメンタルヘルス支援、実証型ソーシャルワーク（Evidence-based social work）、ゲイやレスビアンなどのジェンダー問題などを学ぶことができた。特に全体基調講演では、Risk Assessmentを学ぶことが出来た。Risk Assessmentをどのようにソーシャルワーク実践に適用させるのかという、様々なリスクを抱えやすい教育現場におけるRisk Assessmentの重要性を学ぶことができた。日本ではRisk AssessmentというよりRisk Managementが高齢者福祉領域で活用されてきているが、児童領域や障害者領域ではまだまだ導入がなされていないといっても過言ではないと言える。



アメリカスクールソーシャルワーク協会の学会での講演の様子

5. 進級テスト

5月は進級のための総テストが3日間に渡って実施された。進級テストの目的は、1年間習ったソーシャルワークの基礎知識を測り、2年次に進級できるか

2007年春学期第5回学期末レポート

を審査することが第一の目的となっている。おそらく研究者養成が目的ではないので、修士論文がない代わりに、日本でも話題になっている専門職課程大学院として専門職の知識やスキルを重視しているのだろう。テストの内容は、1つの家族のケース（聴覚障害も関わっている）に今まで習ってきた5つの基礎クラスである人間行動と社会環境（Human Behavior and Social Environment）、ソーシャルワーク理論（Social Work Practice）、インターンシップ（Foundation Field）、社会福祉政策(Social Work Policy)、リサーチ(Research)の知識や観点からどのように援助したらいいのかを回答する形式であった。具体的には、5つのクラスから設問があり、3日間（54時間）の期限内に15ページのレポートを書く形式となっている。自分の得意分野であるリサーチについては、すんありと書けたが、質問が多く時間のかかったソーシャルワーク理論と膨大な分析が必要な社会福祉政策には、提出期限ぎりぎりまで手を焼かされた。進級テストの様子は、1日目は24時間通しで楽しく回答していたので、1日で主な回答を書くことが出来た。2日目は再度質問を読み直し、的をはずれている回答を書き直したり、参考文献を挿入したりすることに集中した。2日目の夜に3時間ほどばかり寝ることができた。3日目は、見直し、文法チェックを行い、余裕を持って3時のメ切前の2時半頃に提出することができた。3日間を通じて、3時間しか寝ることが出来なかったが、アメリカ人のクラスメイトと応援しあいながら書き上げることができたのは大きな経験となった（実際には、進級試験に関して他のクラスメイトを助けたり、情報共有することは厳しく禁じられていたので、状況経過を報告し在ったり、一緒に夕食を食べてリラックスするなど精神的に支え合っていた。このような面で寮のメリットを大いに感じる事が出来た）。

テストはAPAという厳格な論文形式で書かなければならず、違反した場合には即刻不合格となるようである。基本的にフォントはTime new roman、文字の大きさは、12ポイント、行間は2ポイントとなっている。そのほかにもいろいろな細かい決まりがあり、多くの留学生が第一にぶつかる壁といっても過言ではないだろう。これまでのクラスでのレポートもAPAで提出している。アメリカ

2007年春学期第5回学期末レポート

の学会誌や専門書は基本的にAPA形式となっており、この1年間を通じて、APAの書き方をさらに深く知ることができたことは、今後に大いに役立つだろう。

進級テストの結果は、5月12日の月曜日の夜7時頃にクラスメイト全員に個別の一斉に発表された。朝9時から再試に備えて、机の前で準備していたが、夜の7時まで何の連絡もなくハラハラしたが、幸いにも一発で合格することができ、誰もいない部屋でジャンプしながら喜んでいた。試験においてはこれまでのソーシャルワーカーとしての経験や知識が試験の時に多いに役立ったのだろうが、試験に合格し、卒業のために必要な1つのステップをクリアできたことにひとまずほっとしている。しかし、何名かのクラスメイトが再試となったと聞くと、素直には喜べなかったが、再試の期間も過ぎ、全てのクラスメイトが2年次に進級できたと信じてやまない。

6. 144回卒業式

進級試験の後の5月16日に大学の卒業式が執り行われた。去年に続いて、卒業式を保護者に混じって参加したが、いつ見てもアメリカの大学の卒業式は日本と違って「これが卒業式だ」と思わせてくれる雰囲気がある。今年は、日本の友人も含め何名かの友人が卒業した。また例年と比較して、留学生の卒業生が多かったようである。来年の5月に自分も卒業式に参列できるよう残り1年の留学生生活を頑張っていきたい。今年卒業された皆さん、卒業おめでとう！



卒業式で、ダヴィラ学長が式辞を述べている様子

2007年春学期第5回学期末レポート

7. その他

春休み直前に、私がお世話になっている日本財団の笹川会長が Gallaudet University を訪問し、日本財団に支援を受けている多くの留学生との情報交換、懇談を目的とした懇談会に参加した。Gallaudet University のロバート・ダビラ学長も臨席し、それぞれの留学生が自己紹介、さらにそれぞれの国のろう社会の問題について話し合ったりした。また Gallaudet University の協定大学である国立大学法人筑波技術大学から7名の訪問があり、彼らと交流した。訪問の目的は、Gallaudet University と National Technical Institute for the Deaf (NTID) といった国立大学法人筑波技術大学の協定校との交流が目的であった。このように Gallaudet University にいる在籍している間は、可能な限り多くの訪問者と交流したいと思った。また同時に日本ろう社会からも注目されているのだと感じた。

4月には、ワシントンD.C.は日米交流のシンボルであるさくら祭りが開催された。1年目は最終レポートなどで時間が合わずに参加できなかったが、留學生活も落ち着いてきた2年目にて初めてさくら祭りに参加することができた。当日はパレードやたくさんの日本食を中心にアジア系の屋台が多く並び、久々に日本食を楽しむことができた。



さくら祭りでのパレード